【宮城県気仙沼市の方言概観】

ここでは、昨年度の『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』と、今年度の『生活を伝える被災地方言会話集』に現れた特徴を中心に、伝統的な気仙沼市方言の音声や文法を概観していきます。

¶音　声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは簡単に言えば、単語の頭以外の位置にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になり、濁って聞こえることです。専門的に言えば、母音に挟まれた無声子音/k//t/が有声子音/g//d/になることで、有声化と呼びます。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば「柿」は「ガギ」にはなりません）。

例）カ行→ガ行（/k/→/g/）　：開ける→アゲル、柿→カギ
　　タ行→ダ行（/t/→/d/）　：旗　　→ハダ、　的→マド

この特徴は、会話集の話者たちにもかなりよく保たれているようです。例えば、カ行音については、「シガタネ」（仕方ない）、「オモイガラ」（重いから）、「サギ」（先）、「ソンドギ」（その時）、「イップグ」（一服）、「シンブンコーコグ」（新聞広告）、「モーシャゲネー」（申し訳ない）、「ヨーダゲ」（用だけ）、「サムイゴト」（寒いこと）、「ワルイゴド」（悪いこと）、また、タ行音については、「オダク」（お宅）、「イダ」（居た）、「モジツギ」（餅搗き）、「ウジ」（家）、「アズイ」（暑い）、「コンニズワ」（今日は）、「アワセデ」（合わせて）、「アセ　カイデダ」（汗かいてた）、「アドデ」（後で）、「トモダジド」（友達と）、といった例が聞かれます。

ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。それら軽度の有声化音も、文字化資料ではガ行・ダ行の文字で表示してあります。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外の位置にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルとなり、「上げる」と混同してしまいそうです。しかし、「上げる」のほうは「げ」が鼻濁音、すなわち鼻にかかった濁音（「ケ゜」のように半濁点で表記する）となり、

「開ける」＝アゲル
「上げる」＝アケ゜ル

で両者の混同は起こりません。このように、「げ」が鼻にかかる現象を鼻音化と言います。

会話集の話者たちもこの特徴を持っています。例えば、「オネカ゜イ」（お願い)、「ヤスメナカ゜ラ」(休めながら)、「ツキ゜ノ」(次の)、「トーリスキ゜レバ」(通り過ぎれば)、「メク゜マレデ」(恵まれて)、「イソク゜」(急ぐ)、「オガケ゜サマ」(おかげさま)、「オミヤケ゜」(お土産)、「スコ゜ド」(仕事)、「マコ゜」(孫）のような発音が聞かれました。ただし、鼻にかかっているのかいないのか微妙で、聞き取りの難しいケースも多くありました。そこで、昨年度の会話集では一律に鼻濁音で表記してあります。

今年度の会話集では、この一律表記を改め、実際の聞えに従って鼻濁音で表記した場合と、非鼻濁音で表記した場合とがあります。概して A さん（女性話者）は非鼻濁音で、B さん（男性話者）は鼻濁音で発音することが多いという傾向にあります。ただし、A さんにも鼻音的な発音が聞かれたり、B さんにも非鼻音的な発音が聞かれたりするときがあります。また、この聞き取りは、文字化担当者によっても異なり、より鼻音的に聞こうとする担当者と、より非鼻音的に聞こうとする担当者がいます。そのような状況が生じるほど、このガ行鼻音は、かつての伝統的な発音に比べてかなり弱まってきているのかもしれません。

以上のガ行に加えて、同じようにダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ᶯダ・ᶯゼ・ᶯビ」のように上付きのンで表記します)。

例）ダ行：肌　　→　ハᶯダ
　　ザ行：風　　→　カᶯゼ
　　バ行：首　　→　クᶯビ

以前は、気仙沼市でもこうした発音が行われていたものと思われますが、現在は衰微が著しく、会話集の話者たちからはほとんど聞かれませんでした。

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似た

ように発音される。

☞これは「口蓋化」と呼ばれる現象の一種です。この場合の口蓋化とは、キの発音をするときに、舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を指します。

例）機械（きかい）　→　チカイ
　　救急車（きゅうきゅうしゃ）　→　チューチューシャ
　　今日（きょう）　→　チョー

上の例では、「チ」と表記しましたが、気仙沼では完全にチになるのではなく、キのあとにシの発音を添えるような微妙な音になることが多いようです。会話集の話者たちにもこの特徴は見られ、「チケバ」（聞けば）、「カッテチタ」（買ってきた）、「ヤルチ」（やる気）のような例が聞かれます。この傾向は、今回の会話集の B さんの発音によく現れているようです。

【母音】

▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例）息（いき）、駅（えき）　→　両方ともエギ
　　鯉（こい）、声（こえ）　→　両方ともコエ

会話集の話者たちからも、「エカ゜レネー」（行かれない）、「エレレバ」（入れれば）、「エラレナガッタ」（居られなかった）、「オネカ゜エシマス」（お願いします）、「センダエ」（仙台）、「ハヤエ」（速い）などの例が聞かれます。ただし、この特徴も弱まってきており、イとエが似たような発音になるものの、完全に同じではなく、一応区別はするという状態になりつつあるようです。

▼アイ、アエの融合

連母音のアイやアエが融合し、エと発音される。

☞アイ、アエの融合音はもともと単純なエではなく、エァのようなエとアの中間的な発音であったと言われていますが、会話集の話者の発音はすでにエと同じ発音になっているようです。この現象は「知ラナイ＞知ラネー」のように東京などでも起こりま

すが、気仙沼の場合は、例えば次の例のように短くエと発音されるので注意が必要です。「イゲネ」（行けない）、「オモデ」（重たい）、「ユックリシテキテネッテ」（ゆっくりしてきたいねって）。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言います。宮城県ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」のように発音され、これらは区別がありません。いわゆるズーズー弁と呼ばれる所以です。

例）獅子（しし）、煤（すす）、寿司（すし）　→　すべてスス
　　知事（ちじ）、地図（ちず）、辻（つじ）　→　すべてツズ

会話集の話者たちからも、「タオステ」（倒して）、「センエンスカ」（千円しか）、「スコス」（少し）、「トーイス」（遠いし）、「ツカ゜ウ」（違う）、「コンニズワ」（こんにちは）、「マイニズ」（毎日）、「ダイズナシャスン」（大事な写真）、「オナズ」（同じ）などの発音が聞かれました。

ただし、現在ではこの中舌化の特徴も弱まりつつあり、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、という段階に入りつつあります。共通語とあまり変わらない発音が聞かれることも多くなっています。

¶アクセント

気仙沼市のアクセントは、宮城県中・南部の無型アクセントとは異なり、アクセントの型をもつ有型アクセントである。

☞例えば「橋」と「箸」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっていて（＝型が有る）、それによって単語の区別がつきますが、無型アクセント地域では高低が決まっていない（＝型が無い）ため、区別されません。

低い発音を細い文字、高い発音を太い文字で表すと、気仙沼市の場合、「橋」と「箸」は、単語のみ発音したときには両方とも、［ハシ］ないし［ハ**シ**］のような似た発音になりますが、助詞をつけて「橋が」「箸が」と発音すると、「橋が」の方は［ハシガ～

ハ**シガ**]、「箸が」の方は［ハ**シ**ガ］のようになり、区別が現れます。

高年層においては、共通語の［**ハ**シガ］のように単語の頭が高い発音はあまり聞かれません。ただし、世代が下るにつれ共通語化が進み、若い世代では、そうした単語の頭が高いアクセントも聞かれるようになってきています。

¶文　法

【助動詞】

▼「ベ」

共通語の「～だろう」（推量）や「～しよう」（意志）に相当する形式に「ベ」がある。

☞「ベ」は＜推量＞＜意志＞のほかにも＜確認＞＜勧誘＞などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例）明日、雨だべ。（明日雨だろう。）　＜推量＞
　　明日は早く起きッペ。（明日は早く起きよう。）　＜意志＞
　　お祭り、お前も行くべ？（お祭り、お前も行くだろう？）　＜確認＞
　　みんなでがんばッペ。（みんなでがんばろう。）　＜勧誘＞

会話集では、「ハゴンデモラッテイーベガー」（運んでもらっていいだろうか）、「チョーシデモ　ワルガッタベガ」（調子でも悪かっただろうか）などのように「～ベガ」の形で相手に確認をとる用法が見られます。また、「ナンダベ　オグレッタヤ」（なんだろう、遅れているよ）、「オライデモ　コイズスカネーノニ、ナゾスッペ」（うちでもこれしかないのに、どうしよう）、などのように、「ナンダベ」「ナゾスッペ」の形で感動詞風に使う発話も聞かれます。

☞特に「ベシ（ペシ）」の形で相手に強く勧める用法もあります。

例）オラエサ　オイデオグベシ。（私の家に置いておこうよ）
　　ンデ　カワガシテ　カエッペシー。（それでは乾かして帰ろうよ）
　　オッキナコイデ　オーエンスッペシー。（大きな声で応援しようよ）

▼「ダイ」

共通語の「だろう」にあたる形式として「ダイ（ダエ)」が使用される。

☞「ダイガ」の形で質問によく使用されます。

例）ダイジョーブダイガ。(大丈夫だろうか)
ガマンカ゜タリナインダイガネー。(我慢が足りないんだろうかねえ)
アー　ホンダエカネー。(あー、そうだろうかね)
アレ　アソコニ　イルヒト　Ｃサンダエガネー。（あれ、あそこにいる人、Ｃさんだろうかね)
ソースレバ　アンダモ　ラクダイッチャナ。(そうすれば、あなたも楽だろうな)

▼「ゴッテ」

推量を表すのに「ゴッテ」という形式もある。共通語の「ようだ」にも対応する。

例）サンゼンエングレモ　アレバ　イーゴッテネー。(三千円ぐらいもあればいいだろうね)
アカ゜ッタゴッテ。(緊張したようだね)

▼「レル・ラレル」

受け身の形式が、意味的に「～てもらう」に当たる受益表現としても使用される。

例）アー　ホンデ　キカレテ　イガッタ。(あー、それでは聞いてもらってよかった)
アラ　ナント　モシャゲネーゴド。イッツモイッツモ　マゲライデ。(あら、なんと申し訳ないこと。いつもいつも負けてもらって)

☞共通語では、このような場合「れる」「られる」を使うと、被害や迷惑の意味になります。恩恵を受ける場合には、共通語だと「～てもらう」を用いるのが普通です。

【格助詞】

▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる形式を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主語を表す助詞や、「を」のような目的語を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることがよく見られます。特に、「を」にあたる助詞に顕著です。

例）主語　：俺　行く（俺が行く）
　　目的語：酒　飲む（酒を飲む）

会話集の話者たちからも、「タノシミ　フエダゴド」（楽しみが増えたこと）、「ダイズナシャスン　ハイッテッカラ」（大事な写真が入っているから）、「スコップ　コワスチマッタ」（スコップを壊してしまった）、「コイズ　カリテイッカラ」（これを借りて行くから）などのように、「が」や「を」を使わない発話が聞かれました。

さらに、「アスアサッテー　ナンネート」（明日、明後日にならないと）、「オセワ　ナッカラ」（お世話になるから）のように、「に」にあたる助詞を使わない場合も見られます。

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる形式に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところも多くあります。

例）ドゴサ　イク゜ノー。（どこへ行くの）
　　ヤマサ　イッタンダネー。（山へ行ったんだね）
　　エサ　カエッデキデ。（家に帰ってきて）
　　トーチャンサ　カタリサ　インカラ。（お父さんに話しに行くから）
　　サソイサ　キタ。（誘いに来た）
　　コンナトゴサ　ナケ゜デー。（こんなところに捨てて）
　　オユッコサ　ハイッテ。（お湯に入って）
　　ココサ　トマッテタ。（ここに泊まっていた）

ただし、「サ」は共通語の「に」ほど広い意味をもっているわけではありません。微妙なのは存在の場所を表す用法であり、今回の会話集でも、「シズカ゜ワサ　イルノデ」（志津川に居るので）のように「サ」を使った発話例が聞かれる一方、「アソコニ　イルヒト」（あそこにいる人）、「ソゴニ　アッカラ」（そこにあるから）のように「サ」を使わず「ニ」を用いた発話例もあります。気仙沼市では、もともと「～サ　いる」「～サ　ある」という言い方はしませんでしたが、しだいに、そのような言い方をするようになってきたものと考えられます。

【接続助詞】

▼「ガラ」

共通語の「から」に当たる形式（順接既定条件）に「ガラ」がある。

☞「ガラ」の用法は共通語の「から」とほぼ同じと思われます。共通語同様、次のように、終助詞的に使用されることもあります。

例）スグニ　カエサナクテモイーガラー。（すぐに返さなくてもいいから）
クエナェワゲデ　ナイガラネ。（食えないわけではないからね）
ホンデー　タノムガラネー。（それでは頼むからね）
シトニモ　ワラワレッガラサー。（人にも笑われるからさ）

▼「ケント（モ）」

共通語の「けれど（も）」に当たる形式（逆接既定条件）に「ケント（モ）」がある。

☞「ケント（モ）」のほかに、「ケンド（モ）」「ゲント（モ）」「ゲンド（モ）」といった濁音の加わった形も使用されます。また、「ケット（モ）」のように促音の形も聞かれます。これらは、その時々の発話によって異なります。

例）カリニ　キタンダケントモ　カシテケンネベガネスー。（借りに来たんだけれども、貸してくれませんかねえ）
マズイケンド　クエナェワゲデナイガラネ。（まずいけれど、食えないわけではないからね）
カリッカト　オモッタンダゲント　ドーダベ。（借りるかと思ったんだけれど、どうだろう）
ナンニモ　ワカンナイゲンドモ　ンデ　ヨロシグー。（なんにもわからないけれども、それではよろしく）
モーシワゲネーケッド　ンデ。（申し訳ないけれど、それでは）

☞「カラ」と同様、終助詞的に使用されることも多いようです。

例）メーワグカゲテ　モーシワケネーケント。（迷惑かけて申し訳ないけれど）
アナホリ　シテタンダケントモッサー。（穴掘りをしていたんだけれどもさ）
ソンナコトモ　ネンダケントモ。（そんなこともないんだけれども）
サムイノ　クルッツノ　ワカッテンダケントモネー。（寒いのが来るっていうのは分かっているんだけれどもね）

▼「ケ」

共通語の「たら」「ところが」「のに」に当たる形式に「ケ」がある。

☞「～タッケ」という形で使われることが多いようです。

例）アレ　ダレガト　オモッタッケ　Ｂサン。（あれ、誰かと思ったらＢさん）
イマ　サイフ　ミダッケ　コレ　オガネ　タンネノッサー。（今財布見たところが、これ、お金足りないのさ。）
キノーマデ　ゲンキデ　イダッケー　チョーシ　ワルイッテ、ダイジョーブダイガ。（昨日まで元気でいたのに、調子悪いって、大丈夫だろうか）

【接続詞】

▼「ンダガラ」「タ（ッ）ケ」「ンデ」「ンダゲッド」

共通語の「だから」にあたる「ンダガラ」、「そしたら」にあたる「タ（ッ）ケ」、「それでは」にあたる「ンデ」、「だけど」にあたる「ンダゲッド」などが用いられる。

例）ンダガラ　モッテガレネーンダイヤ。（だから、持って行かれないんだよ）
タケ　ソンナゴド　アンノスカッテ　イッタテネ。（そしたら、そんなことあるのですかって、言ったってさ）
ンデ　ビョーインサ　イッテ　ミデモライッスペ。（それでは、病院へ行って見てもらいましょう）
ンダゲッド　ツゴー　ワルイガラッテ（だけど、都合が悪いからって）
ホンダケットモ　ホラ　マエカラ　ミナレテタカラ　マチゲ゜ネーナー。（そうだけれども、ほら、前から見慣れているから間違いないな）

☞「ンダガラ（ホンダガラ、ダガラ）」は、単独で相づちのようにも使われ、相手の言ったことへの強い同意・共感を表す用法もあります。

例）Ａ：アラ　Ｂサン　サンサイトリニイグカッコシテ。（あら、Ｂさん、山菜取りに行く格好して）
Ｂ：ンダガラー。ソロソロ　ハエデクルコロダド　オモッテッサ。（そうなんだよ。そろそろ生えてくるころだと思ってさ）

Ｂ：アンダノゴッダカラ　ヨグタゲダンダベヨ。（あなたのことだから、欲張ったのだろうよ）
Ａ：ンダカラー。 ナーニ　イッパイ　モッテゲモッテゲッテ　ユーガラネ（そうなんだよ。なに、いっぱい持って行け持って行けって言うからね）

【副助詞】

▼「サケァ」

共通語の「さえ」にあたる形式として「サケァ」が使われる。

例）ジモトニイテサケァ　ヤンネァノニ（地元に居てさえやらないのに）
　　アツササゲァ　トーリスキ゜レバ（暑ささえ通り過ぎれば）

【終助詞】

▼「チャ」

共通語の「だろ」「じゃない（か）」「よね」などにあたる形式として「チャ」が用いられる。

☞相手が知っているはずだ、当然わかるはずだ、と思う事柄を示し、相手に確認させる機能があります。会話集では、次のような例が聞かれます。

例）アルケバイーッチャ。（歩けばいいじゃないか）
　　ホラ　アッタッチャ。（ほら、あったじゃない）
　　アンダ　ジェンゴ　ネーナンツノワー　メズラシーッチャ。（あなたがお金がないなんていうのは珍しいよね）

▼「オンネ」「オンナ」

共通語の「もんね」「もんな」にあたる形式として「オンネ」「オンナ」が使われる。

例）カエッテコレネガッタオンネ。（帰って来られなかったもんね）
　　マダ　カエッテコネオンネ。（まだ帰って来ないもんね）
　　ンダオンネー。（そうだもんねー）
　　オラエニ　ソンナン　ネーオンナ。（うちにそんなのないもんな）

▼「ッサ」「ノッサ」

共通語の「さ」「のさ」にあたる形式として「ッサ」「ノッサ」が使用される。

☞共通語の「さ」「のさ」に比べてよく使用されます。ニュアンス的にも違いがありますが、一応「さ」「のさ」と共通語を当ててあります。ものごとを突き放して述べたり、説明的に語ったりするときに用いられます。

例）オライドゴ　チョード　サンマ　キレダガラッサ。（うちではちょうどサンマなく

なったからさ）
ナンニジッサ。（何日さ？）
ダレガサ　アゲテモイーガドモッテ　モラッタノッサ。（誰かにあげてもいいかと思ってもらったのさ）
オガネ　タンネノッサー。（お金が足りないのさ）
オレ　ヤクソグー　イマ　アンノッサー。（私は約束、今、あるのさ）

▼「テバ」

共通語の「ってば」にあたる形式として「テバ」が使われる。

☞共通語に比べてよく使用されます。ニュアンス的にも違いがありますが、一応「ってば」と共通語を当ててあります。共通語の「ってば」ほど強く言い放つ感じはありません。

例）ソンナコト　ネーデバ。（そんなことないってば）
ダレー　ムリダテバー　オラエデー。（なに、無理だってば、うちでは）
オラエデ　ヤメロッテ　ゼッテー　ユーデバ。（うちではやめろって絶対言うってば）

▼「ト」

共通語の「よ」にあたる形式として「ト」が用いられる。

☞強く念を押す感じです。

例）コレカラモ　タノミスト。（これからも頼みますよ）
ソノタンビ　チカ゜ウガスト。（その度に違うんですよ）
ソノホ　イーガストー。（その方がいいですよ）

▼「ネス」

丁寧に相手にもちかける終助詞として「ネス」が使用される。

例）オンデ　タノムカラネス。（それでは頼みますからね）
カシテケンネベガネス。（貸してくれませんかね）
コイッテ　イーベガネッスー。（これっていいでしょうかね）

【敬語】

▼「ス」「ガス」「ゴザリス」「ハリス」「(ラ)イン」

敬意を表す形式として「ス」「ガス」「ゴザリス」「ハリス」「(ラ)イン」などがある。

☞共通語との対応を考えると、大まかに言って、「ス」は「です」「ます」、「ガス」は「です」、「ゴザリス」は「ございます」、「ハリス」は「なさいます」などにあたります。「(ラ)イン」は相手に丁寧に働きかける言い方で、柔らかい印象を与えます。

例）ブッサンイチカ゜アッカラ　イカ゜ネッスカ。(物産市があるから行きませんか)
コゴデ　ワゲルスカ。(ここで分けますか)
ハイハイ　ワガリシター。(はいはい、わかりました)
オラエノズンツァマモ　ヨロゴンデオリシタ。(うちの爺さんも喜んでおりました)
オヒル　タベダノスカー。(お昼食べたのですか)
ナーヌ　イーガスー。(なに、いいです)
アッチノ　オヤゴサマ　アリガデガッス。(あっちの親御さま、ありがたいです)
オハヨーゴザリス。(おはようございます)
アリカ゜ドゴザリシタ。(ありがとうございました)
ハイハイ　ゴメンナハリセー。(はいはい、ごめんなさいませ)
ハヤグ　ハイッテ　ネサハリセ。(早く入っておやすみなさいませ)
オジャッコ　ノマイン。(お茶を飲んでください)
コエ　カケテケライン。(声をかけてください)
ホッカミシネデ　アルガインヨ。(よそ見しないで歩きなさいよ)

▼「ダイ（ン)」

共通語の「いらっしゃい」にあたる言い方として、「ダイ（ン)」が用いられる。

例）ダイッテ　イワレダンネ。(いらっしゃいって言われたのね)
イッテダイン。(行ってらっしゃい)
ミンナデッサ　マズー　ハバギヌギ　シテダイ。（みんなでさ、まあ、慰労会していらっしゃい)

☞お客を送り出す挨拶言葉として、気仙沼市では「マタダイン」(またいらっしゃい)という言い方をよく耳にします。

▼「オンナイ（ン)」

共通語の「おいでなさい」にあたる言い方として、「オンナイ（ン)」がある。

例）ホンデ　キョーツゲデ　ハヤグ　オンナイン。（それでは気をつけて、早くおいでなさい）
カワッテヤッカラ　イッテオンナイ。（替わってやるから、行っておいでなさい）
ホンデァ　マタ　キテオンナイ。（それではまた来てください）

【接尾辞】

▼「～コ」

名詞のあとに「～コ」を付けて、そのものへの親近感を表す。

例）オジャッコ　ノマイン（お茶を飲んでください）
カネッコ　ハタイデ（お金をはたいて）
ウダッコ　ウマイガラ（歌がうまいから）
ハタケッコ　アンノデ（畑があるので）
フトンコマデ　ヨコ゜スツマッタナー。（布団まで汚してしまったな）

【感動詞】

▼「バ」

共通語の「あれ」「まあ」にあたる形式として形式として、「バ」が使用される。

☞「バ」は想定外の事態に対する驚きを表します。ババババと連呼したり、バーと引き伸ばしたりすることで細かな感情の違いを表現します。「バヤバヤ」という言い方もあります。

例）バー、アンタ　ズイブン　イソガシグ　デテジタネー。（あれ、あんた、ずいぶん慌てて出てきたね）
バー、シタマデ　コレー　コンナニ、バーバー。タダミマデ　イッタガモー。（まあ、下まで、これこんなに（濡れて）、あれあれ、畳まで浸みたかも）
バヤバヤ、イマ　カエッテキタノスカー。（あれまあ、今帰ってきたのですか）
Ａ：ウタッテ　オドッテ　タノシマセテモラッテキタヤ。（歌って踊って楽しませてもらって来たわ）
Ｂ：バーババババババ。（なんとまあ）

▼「ダレ」

共通語の「なに」「どうして」にあたる形式として、「ダレ」が用いられる。

☞疑問詞「誰」の感嘆用法です。質問の言い方ではありません。

例）ダレー　コンナトゴサ　ナゲ゛デー。（なに、こんな所に捨てて）
ダーレ　ホレ　コゴ　シンブン　ヒロゲダリナンカ　スルドゴダモノ。（なあに、ほら、ここは新聞を広げたりなんかするところだもの）
ダレヤ　ホンナコト　イワネデ、イガスト　タマニー　イッショニ。（なにさ、そんなこと言わないで、いいではないですか、たまに一緒に）
ボーシモ　カブンナェデ、ダレーー。（帽子も被らないで、どうしたの）

◆以上のほか、パンフレット『支援者のための気仙沼方言入門』にも、特徴的な単語を含めて気仙沼市方言の特色を解説しておきましたので、参考にしてください。東北大学方言研究センターの Web サイト「東日本大震災と方言ネット」の次のページでご覧になれます。

http://www.sinsaihougen.jp/大震災と方言活動情報/支援者の方へ/

【参考文献】

加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210
加藤正信（1992）「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典　第 1 巻』明治書院
小林隆編（2012）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4　北海道・東北地方の方言』国書刊行会
尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』全 3 巻
菅原孝雄（2006）『けせんぬま方言アラカルト 増補改訂版』三陸新報社
東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う－3.11 被災地からの提言－』ひつじ書房

※このほか、会話本文の注の作成に当たっては、多くの先行研究を参考にしました。